
A black waltz

閑 鈴呼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

A b l a c k w a l t z

【Nコード】

N 4 8 6 4 A

【作者名】

閑 鈴呼

【あらすじ】

父と母の死から逃げてきた15歳の麗音はある日、AMOという殺し屋になる。幸せとは何なのか、なぜ生まれてきたのか、生きるために戦う少年たちの戦争物語が始まる。

第一章 始まりの協奏曲：第一話

俺はずっと戦ってきた…。生きるために戦わなければならなかった。

「麗音、こっち向いてー」

一人ビデオカメラをまわす。大した出来事もないのに片手にはいつもビデオカメラを持っていた父。

「麗音ちゃん、ママ、ケーキ焼いてみたの。どうかしら」

エプロン姿で、キッチンをパタパタと走り回る。

母の作るもの全てが俺の大好物だった。

…俺は、あの頃の二人が大好きだった。俺の笑う顔見て、二人同時に笑ってみたり、俺が機嫌悪いと、二人して困って大騒ぎしてた。

麗音は、幸せだったよ。

「貴方！麗音に何をするんですか?!」

ある日、父が帰って来るとその手に包丁を持って俺を切りつけた。

「みんな、ここで死のう。お父さんが楽にしてあげるから…」

昨日のような父ではなかった。父はそばにいた母に包丁を切りつけた。

母の首を、父は思いっきり切った。

悲鳴を、俺は聞き逃さなかった。

首から流れてゆく血を、俺と父は見ていた。
父は嬉しそうに笑った。

俺は一目散に家を駆け出した。
父から、母の死から、俺は逃げた。

外は雨が降っていた。
体の外側から冷えてくるような、冷たい、冷たい雨だった。

“これからどうしようか？”

答えがでるはずもない質問を、俺は自分に何度も聞いた。

母は死んだだろう。

…父も、俺が逃げたから、自殺でもしたんだろうな。

優しかった二人。

父を、あの父を変えたのは何だったんだろう。

いつそ、ここで死のうか。

ごめん、ママ。俺を逃がしてくれたのに。俺にはもう、生きる道なんてないよ。本当に、ごめん。

踏み切りの前で、一度立ち止まる。電車が、こっちへ来ている。線路の上に、俺は立った。

短い15の命が、今終わろうとしている。俺は目を閉じた。

「麗音！！」

そう、呼んだのは誰だったんだろう。

目の前を、電車が通り過ぎてゆく。
車のやかましい音が、耳で響いてる。

…俺、何やってるんだろう。

馬鹿みたいだな。

麗音は、十分な死に方もできない弱虫だったね。

やかましい音が消えてゆく。

誰かの声が、聞こえた気がした。

幻かな？だって、俺にはもう、心配したり笑ってくれる人なんて、
この世界にはいないんだから。

ママ。パパ。麗音は、…麗音は、二人がいてくれればそれだけで幸
せだったよ？

第一章 始まりの協奏曲…第二話

太陽の光が、まぶしく輝く。…天国にも太陽はあるのか？

「…ここは…？」

大きなベットに白い毛布。窓の近くに木造りの机と椅子が置かれている。風が吹いて、鮮やかな緑色のカーテンが揺れる。その隣で、今、ゆっくりと扉が開いた。

「目が覚めたみたいだね。」

白衣をまとった小柄な男は、俺を見てそう言った。

「君、名前は？」

ココアの甘い匂いが、扉の向こうからしている。

「…レオン」

「そうか。僕は中村というんだ。君は“中村先生”と呼んでくれればいい」

その、中村先生は、机の隣の椅子に座る。

「あの、ここはどこなんですか？」

「保健室だけど？」

「…。」

保健室だって？じゃあここは学校か？だけど俺はこんな所に来た覚えはないぞ？

「君は新入りだからね。もうすぐリーダーが迎えにくるよ。」

は？何の新入りだよ。

俺は、死んだんじゃないのか？

…だとしたらここはどこなんだ？

…でも、またコイツと話していても何も解らないな。大人しくリーダーとやらを待つか。コンコン、とドアをノックする音が聞こえた。「中村先生、新入りどうですか？」

ひょこつと顔を出したのは茶髪の派手な格好の女だった。

「アティ。今、起きた所だよ。」

アティと呼ばれたその女は、俺の顔をじっと見てから、にっと笑った。

「私はアティっていうの。チームの中で一番年上だけど、まだ18だから。宜しくね」

そう言っと、アティは握手をするように俺の手を握った。

「彼の名前はレオンだ。アティ、宜しく頼むよ」

「了解。」

…俺はまだ、理解できていない。そっちで勝手に話を進めないでくれ。

「じゃ、レオン。マスターの所に行くよ」

そう言ってアティは俺の手を引っ張る。

「…っ待てよ」

アティも、中村先生も啞然とした顔で俺を見つめた。

「ここはどこなんだよ。どうして俺はこんなところにいるんだ？説明してくれ」

部屋が、沈黙になった。中村先生が、口を開く。

「アティ。マスター、この仔に話してないの？」

「そのまま連れてきたみたいだったし。マスターが名前知らないって何かおかしいと思った…。」

…意味が解らない。そのまま連れてきたって、俺は誘拐でもされたのか？

「あのね、レオン。驚かないで聞いて。」

もう十分驚いてる。これ以上ないくらいにな。ここが天国でも俺は驚かないだろう。

「ここは、アディア国の秘密機関、AMOのアジト。」

「…は？」

「…アディア殺人鬼機関。つまり依頼があれば人を殺す仕事をしているの。」

「AMOのマスター、オルハが君を気に入って連れてきたみたいなんだ。」

場所が解れば、安心すると思ったんだが、大間違いだ。何てこった…。俺はこれから殺人鬼になるのか。これは想定外だ…。

「とにかく、マスターの所へ行つて話を聞きましょう。」

大変なことになった…。俺は、死ぬのが怖くて逃げてきたのに、ここで人を殺す仕事をすることになるなんて。俺は、こんな未来を想像していたわけじゃないのに。

「レオンは何歳？」

「15」

「そっか。じゃあみんなと同じくらいだね。」

ママ。俺はやっぱり、あの頃が一番楽しかったよ。人が死ぬ所なんて、死んでゆく姿なんて、もう二度と見たくない。

「マスター、レオンを連れてきたよ。」

「ああ。レオンというのか。ご苦労だった。アティは部屋から出ていなさい」

マスターは、大きな椅子をこっちへ向けると優しい顔で微笑んだ。
「かけなさい」

マスターはそう言うのと立ち上がって話しはじめた。

「アティからAMOの話は聞いたんだね」

「はい」

俺は3人掛けのソファに一人で座る。

「それなら話は早い。AMOに入らないか」

…コイツ、自分が何言ってるのか解ってるのか？

…何て答えりゃいいんだ。

「深く考えなくていい。ただ、覚悟は必要だな。」

「…覚悟？」

「人を殺す仕事だからな。自分の命の危険も伴う。」

マスターは机に置いてあったコーヒーを飲んでしまうと、俺の目の前に座った。

「まあ、自分から死のうとした人間には、必要のない心配だったかな。」

ああ、そうか。この人が俺を助けたのか。外は暗くて見えなかったから、解らなかったんだ。

…何故だか、この人は優しい顔で微笑む。殺人鬼のマスターだなんて、誰が思う？

「…はい。やらせて下さい」

魔法にでもかかったかのように、その言葉はすつと出た。自分でも、解らない。

殺人鬼になるかならないかの話には思えない程、優しい顔をしていた。

アティを大きな声で呼ぶと、扉が開いて、アティが出てきた。

続いて、体の大きな男と、黒い服をまとった女、最後に、小さな体の男の子が部屋に入る。

「みんな。彼がレオン。クララと同じ15歳だよ。」

三人がばらばらに

「宜しく」

と言いながらおじぎをする。

「レオン。左はじから、キヒル。レオンの1つ年上だよ。で、真ん中がレオンと同じ年のクララ。右はじの仔は、12歳のネオだよ。」

「…宜しく、お願いします」

座ったまま、三人におじぎをする。顔を上げると、マスターが口を開いた。

「早速だが、レオン。4人と一緒に今回の依頼を受けてもらう」

マスターは立ち上がり、自分の大きな椅子に座り直す。

4人はそれぞれソファに座った。テーブルの上に、大きな封筒が2つ置いてあった。

「アティ、そこにある資料をみんなに見せて」

アティは、1つの封筒の中身を一人ずつ渡した。

「隣の国・エルナのフォール大統領だ。」

「資料はこれだけですか？」

「詳しいことはエルナの依頼人に聞いてくれ」

「了解。」

アティが立ち上がると、三人も立ち上がる。

「レオン。ついてきて」

アティにそう言われて、俺は4人についてマスターの部屋を出た。

これから、人を殺しに行くのか。そう思うと、気が重い。でも、やるって決めたことだ。

第一章 始まりの協奏曲：第三話

しかし…コイツら、何て冷静な顔をしてやがるんだ。
もう、慣れたってことか？

「レオンは初仕事だけど、難しい仕事は与えないから。頑張っ
てね。」

アティはそう言って、また歩き始める。

…難しい仕事か。俺にとってそれは、人を殺すことだ。

AMOにいるうちにそんなこと平気になるのかもしれないけれど。
今の俺には、一番難しい仕事だ。やれと命令されても出来ないだろ
う。…俺は弱いから。弱い、人間だから。

「レオン。言っておくけど、注意してね。」

クララが、俺に話しかけてきた。

「エルナは兵が強いって有名なの。怪しいと思われぬように気を
付けてね。」

クララは、俺と同じ年だったな。それにしても落ち着いて見える。
俺と同じくらいの仔たちが、こんな所で殺し屋になつていたなんて
俺は知らなかったよ。

…俺は知りたくなかったよ。

電車に乗り込むと、すぐに走り出した。

「みんな。エルナまでまだ時間あるから、自由にしてて。」

アティがみんなにそう声をかける。俺は、車の座席に座る。

風景が、足早に流れてゆく。エルナか…。何度か、行ったことがあ
ったな。

パパとママと、俺と…3人で。その時も、父はビデオカメラを手に
持っていたな…。

エルナ中央公園に咲く桜を見ながら、3人で楽しい時間を過ごした。

…幸せだった…。この幸せが、ずっとずっと続くと思っていた。何の根拠も無かったけれど、そうだって決めつけてた。

…だから、俺は裏切られた気がしたんだ。父が包丁で俺を切りつけた時。

神様に俺は見捨てられたんだと思ったんだ。信じていた家族つてものが、音をたてて崩れていった。

俺は、この目で見たんだ。

「レオン？」

隣に、ネオが座っていた。ネオは心配そうな顔で、俺を見る。

「どうしたの、レオン？」

気付いたら、俺は涙を流していた。慌てて、俺は涙をふく。

「やっぱり初仕事は辛いんだよね。僕の時も、こわくて泣いたんだ。」

怖い…のか？俺は、人を殺すのが怖いのか？

「でも、心配することないから。レオンは実際に殺したりしないでいいんだ。」

見てるだけ、か。何て簡単な初仕事なんだ。だけど、逆にその方が恐ろしい。

今だって信じられない。この4人が、人を殺すなんて。考えられない。

「なあ、ネオ。ネオの親は？」

「僕に親はいないよ。いるとしたら、マスターかな。小さな頃からAMOにいたから。」

「…え？」

小さな頃から…だって？じゃあずっと殺人をしてきたってことか？

「AMOは、帰る場所を失くした子供達を集めてつくった機関なんだ。」

帰る場所か…。確かに、俺にそんな場所はない。

「…淋しくないのか？」

「うん。マスターやアティや…みんなが僕を支えてくれたからね。」
ネオは、本当に嬉しそうに笑った。本当に、淋しくなかったんだ…。
「レオン、今は辛いかもしれないけど、レオンには僕たちがついてるからね。」

そうか。ネオも、アティも…みんな、戦ってきたんだ。一人じゃ何も出来ないから、みんなで力を合わせて、戦ってきたんだ。

「レオンは僕たちの仲間だから。レオンは、一人じゃないんだよ。」
俺は、自分の幸せが崩れてゆくのを見たくなかった。だけど、俺が見ていなくても、幸せってものが今の俺には失くなっていたんだ。
ネオは、自分の目で自分の幸せが崩れてゆくを見たんだ…。

だけどそれは一人でじゃなくてネオには、仲間がいたから乗り越えられたんだ。

「レオンには、大切な人っている？」

…大切な人か…。今はないけれど、パパ、ママ…俺にとって1番大切な人だったよ。

「これから向かうエルナには、僕らAMOでも恐る兵がたくさんいる。」

ネオの顔つきが、急に変わった。これが、人を殺しに行く奴の顔なのか。

「兵を殺さなければ、仲間が殺される。」

これが、本当に12歳の顔なのか？何かに追い詰められた様な、これから死にゆく様な…。

「レオン。兵にはくれぐれも気を付けてね」

「…兵は、全員、殺すのか？」
「殺さなければ、逆に殺される。」

…俺は、人をこんなに怖いと思ったことはない。生きるために、殺さなければならいなんて。

「心臓か首を仕留めるんだ。そうすれば無駄な抵抗も防げる。」
…待ってくれ。俺は…人を殺すために生まれてきたんじゃない。

「レオン？」

俺はすくつと立ち上がり、奥の車両に入っていく。俺の頭の中で、母の首から血が流れる風景がよぎってゆく…。

母は俺を生かしてくれた。自分の命を犠牲にして…。

俺はそんなこと、頼んだ覚えはない。一家心中だって、二人が幸せならばそれで良かった。

…殺されるなら、本望だ。

「…っ。」

ドン、と壁に拳をぶつける。何度も、何度も。指のつけ根が、赤くなつてゆく。痛いなんて、欠片も思わない。

…俺は、何のために、生まれてきたんだ？

幸せになるためじゃないのか。人を幸せにするためじゃないのか。

今、幸せを失った俺には、幸せになることも人を幸せにすることも許されないことなのか。殺されるのが怖いんじゃない。殺すことが怖いんじゃない。

どうして人が人を殺さなくちゃいけないんだ？

どうして言葉が通じるのに、分かり合えないんだ？

そんなの、おかしいじゃないか。そんなの、不公平じゃないか…。

第一章 始まりの協奏曲…第四話

「レオン、着いたよ」

電車がだんだん遅くなり、やがて止まる。それと同時に、バランスを崩して倒れそうになる。

別の車両から、4人が入ってくる。不機嫌そうな顔で、クララは俺の手を引っ張る。

車から出ると、風につて桜ね花びらが飛んできた。

「中央公園の桜か…」

懐かしい風景。確か、ここで俺たちも降りたんだ。

「アティー！待ってたよ。」

白い帽子を深くかぶった男が、こっちに手を振っている。

「中央公園に連れていってくれませんか？」

アティーはその男に笑って話しかける。これは暗号なんだ。

「この桜が教えてくれますよ。」

「…行きましょう。」

「ああ。ついてきてくれ」

そう言われ、アティーとみんなは男についていく。

男は駅の近くの家の前で立ち止まる。すぐに、中からもう一人の男が出て来た。

「みんな、入ってくれ」

言われた通り、俺たちは家の中に入る。ドアが閉まると、自動的に鍵がかかった。

奥の部屋に案内され、カーテンの閉まったうす暗い部屋に入る。

「ご苦労だった。早速で悪いが、作戦の説明をさせてもらう。」

「紹介が遅れたが、こいつはセルフア、俺はファイだ。宜しく頼む」
白い帽子のセルフアは立ち上がり、大きな紙を持ってくる。

「私はアティー。そして仲間の、キヒル、クララ、ネオ、レオンよ。」
俺を含め5人が、2人の男におじきをする。2人は黙って頷く。

「今回の暗殺計画は、あえてシンプルに行く。」

セルフアは持ってきた大きな紙を広げ、説明を始める。

「ここが現在地だ。ここから、中央公園を通って、展望台へ向かってもらう。フオール大統領は、中央公園で会見を開く予定だ。その時を狙う」

「展望台から彼を狙って撃つのね」

「それは最後の手段だ。」

ファイはタバコに火をつける。少し吸って、すぐに吐き出す。

「どうということだ？」

「彼が会見を開く場所に、爆弾を仕掛けた。ベンチの下だ。君たちは展望台から、爆発するのを待ってくればいい」

中央公園のベンチの下に…爆弾をしかけたって？

何がシンプルな計画だ。どのくらいの威力があるのか解らないが、それが爆発したら、犠牲者が出るんじゃないのか？

「上手く爆発しなかったら、そこから彼を撃つて欲しい」

「話は解ったわ。みんな、いい？」

「待ってくれ」

俺が口をはさむ。だって、中央公園には、大きな桜の木があって、人がたくさんいて、そこで爆発が起きるなんて知らないんだろう？

「爆発が起きれば、犠牲者が出るんじゃないのか？」

「犠牲者は、マスコミとエルナ兵だけだ。」

「今日、中央公園は市民立ち入り禁止なんだ。」

人間で、こんなに冷たい目をする生き物なのか。

俺は人間のこんな目を、一度だって見たことはない。

ゾツとする程、冷たい視線だ。

「ほかに質問はないか」

みんなは、何も喋らなかつた。同じ場所にいるのに、俺だけ違う世界にいるような感じがした。

それが、とても怖かった。

「すぐに展望台に向かってくれ。爆発は13時丁度だ。」

時計は、12時をさしていた。アティはセルフアに手を差し出す。セルフアはその手を握る。そして、笑ったんだ。

「成功を祈っている。」

「有難う」

そう言つてアティは部屋を出てゆく。ほかの3人も、アティについていく。クララが振り向いて、こっちだよと言わんばかりの顔をしている。

俺は、重い足を前に出した。セルフアとファイは俺たちが出ていくまで、黙つて冷たい視線を送っていた…。

「話が出来過ぎてる」

体の大きいキヒルが、家を出てから言つた。コイツ、やっと喋った…。

「ええ。市民から依頼なんておかしいと思つたわ」

「あれ、市民の振りしてるけどエルナ兵だよ。顔見たことある」
何だつて？エルナ兵が、エルナの大統領を殺すのか。

「畏だ。間違いない」

「そうとしか考えられないわ。アティ、どうするの？」

アティは考えるように歩いて行く。みんなは沈黙になる。

風が吹いて、桜の花びらが舞う。アティはぴたっと立ち止まる。

「展望台へ向かうわよ」

「…了解」

3人は声を合わせて言う。アティはそれを見て、頷く。

「レオン。レオンに、やって欲しい仕事があるの。」

アティは俺に声をかける。俺は黙つてアティを見る。

…何だ。俺に大統領を殺せつて言うんじゃないだろうな。

初仕事でもう人を殺すのか。アティにとって人を殺すことは簡単なんだろう。

「爆弾がある位置を確認して欲しいの」

「アティ！レオンには危険過ぎる。僕にやらせてくれ！」

爆弾がある位置？あの二人が言った通りベンチの下にあるんじゃないのか？

「ネオには彼を撃つ仕事があるわ。」

…何だつて？ネオが大統領を撃つのか？

「爆発までまだ時間はあるわ。お願い、レオン。」

「…解った」

アティは頷くと、小型の機械を俺に渡した。

「それは爆弾発見機。怪しいと思うところに近付けてくれるだけでいいから。」

俺は頷く。アティは公園の時計を見た。…爆発まで、あと50分。

「一通り見たら公園から出ていて。展望台には来なくていいから。」

「レオン。気を付けて！」

4人はアティを先頭に展望台へ走って行く。

公園にはまだ、マスコミもエルナ兵も来ていなかった。俺は歩き出す。

すると、アティから貰った機械が光りだした。…おい、もう見つけたのか？周りを見渡すと、入口のベンチの下に、紙袋が置かれていた。

それに機械を近付けると、さっきよりも増して光る。

「入口の、ベンチか」

また歩き始める。でも、機械は光ったままだ。壊れたのか？

「…待てよ。全部のベンチの下に同じような紙袋がある…。」

全部が、爆弾なのか？何のためにこんなにも爆弾を…。

展望台へと歩いていく。公園を出たけど、まだ機械は光っている…。

出口のベンチからは距離がある。近いと言えば、展望台の方…。

「…まさか！！」

展望台に爆弾が？！アティは展望台に来るなと言っていた…。

解っていたのか？罠だと解っていたんだ。展望台に爆弾があることくらい、予想出来た筈だ。

俺は振り返り、時計を見る。爆発まで、あと30分。まだ、間に合

う筈だ。俺は展望台へと走り出した。

もう、嫌なんだ。俺の前で、人が死ぬなんて。俺のせいで、人が死ぬなんて。

人が死ぬ姿なんて、二度と見たくないんだよ。二度と、同じ過ちを侵したくない。

なあ。頼むから。俺の前から消えないでくれ。俺を置いて消えないでくれ。

もう…もう、一人になりたくないんだ。

凄、爆発音がしたんだ。10発、20発、…立て続けに…。

第一章　始まりの協奏曲…第五話

飛び起きると、俺はまたベットのの中にいた。…夢、だったのか…？
奥の部屋から、テレビのアナウンサーの声がもれて聴こえる。

「午後１時丁度に起きたエルナ中央公園と展望台の爆発は、今、終
わりを告げました。この爆発で、会見中だったフオール大統領を含
め約一万人が犠牲になりました…。」

…夢じゃなかったのか。じゃあ、アティも、キヒルも、クララも、
ネオも…

みんな、死んだのか。俺だけ助かったなんて。…悔しい。

「あ、起きたんだ？具合はどう？」

奥の部屋から、黒髪の女の子が入ってきた。彼女は俺にコーヒーク
ップを手渡す。

「飲んで。あつたまるよ。」

膝まであるスカートを折って椅子に座る。俺が渡されたものを飲む
と、嬉しそうに笑った。

甘い、ココアの匂いがした。

「腕、痛む？治るまではここにいていいから。」

…そういえば、左腕がズキズキと痛む。見ると、綺麗に包帯がして
あった。

「…これ、あんたがやったのか？」

「リフィア。」

…は？

「私の名前。あんたじゃなくてリフィア。」

「…ああ…」

「あなたは？あなたの名前。」

「…レオン」

…調子、狂うな。コイツ、俺の一番苦手なタイプだ。

「この爆弾を仕掛けたのはA M Oだ！！フォール大統領を殺すつもりだったんですよ！！我々はA M Oを必ず探し出します！！」
奥の部屋にあるテレビには、エルナ兵が怒りをおさえきれないというように訴えてる。

エルナ兵の畏じゃなかったのか？だとしたら、あの二人はいつたい…？

「レオンはどこからきたの？遠いの？」

「…アディアだ。隣の国。」

俺、これからどうするんだ？また、人を殺してしまった…。俺のせいだ。

間に合わなかったのか？…いや、間に合ったんだ。みんなが逃げる時間だつて、十分にあつたんだ。

「レオン！！展望台には来なくていいって…」

「みんな。ここに爆弾が仕掛けられてるんだ。早く逃げ…」

「そんなこと、最初から知ってるわ。」

冷たい目で、アティは俺を見た。ほかの3人も、動こうとしなかった。

「レオン、逃げて。僕たちは大丈夫だから。」

「…大丈夫って…どうする気なんだよ」

「キヒル。レオンをお願い。」

キヒルは黙って俺の手を引っ張って展望台から離れさせた。

俺が呆然としているのを見ると、キヒルはまた展望台に入っていた。

…しばらくして、公園の爆弾が爆発したのを、俺は黙って見ていたんだ。

「ちょっと、レオン。聞いている？」

リフィアは不機嫌そうに、俺の顔を見上げてる。

「…ああ。ごめん。聞いてなかった。」

ふう、とため息をつく。まわりの声が聞こえなくなることってあるんだな…。

「レオンは公園で何してたの？今日、市民は立ち入り禁止だったんだよ。」

…何て答えりゃいいんだ。爆弾の位置を確認してたって？

そんなこと、口が裂けても言えるかよ。

「前に来たときは人がいっぱいいたから、不思議に思ってたな…」
ふーん、とリフィアはじつと俺を見る。嘘がバレたら、何て言い訳をすればいいんだ？

今度こそ正直に言ってやるか。

「今、展望台の救助隊が帰ってきました。展望台に人はいなかったようです。…」

…え？展望台に人がいなかったただって？みんなは…助かったのか？みんなが、無事だといいが…。でもきつと、あの二人もこのニユースを見ているんだろう。

俺たちを探すだろうな。…名前を知ってるんだ。

「え、レオン。どこ行くの？まだ起きちゃだめだよ。」

リフィアは俺の手をつかむ。包帯をまかれた腕が、痛む。

「アディアに、帰るんだ。ここにいちやいけない」

リフィアの手を振り払おうとすると、腕の痛みが増す。

「レオン…。動いたら悪化しちゃうよ。」

黙ってここにいてなんてできない。ここにいたら、みんなに迷惑がかかる。

のちに俺は見つかるだろう。そうなったら、みんなも見つかってしまふ。

「早くアディアに帰らないと大変なことになるんだ。行かせてくれ」
「だめだよ。レオン、治るまでここにいて。」

強い視線が、俺を見つめる。人の気も知らないで…。

「私に出来ることがあったら、言って？」

「…俺をエルナから出してくれ。」

「それは、できない。今、すべての交通の手段がなくなったわ。」

何だって？…AMOを探し出すって言ってたな…。

「何かに追われてるの？政府が落ち着くまでエルナからは出られないよ」

政府が落ち着くのを待つのか。いつなんだ？AMOが見つかるまでか。

…この傷じゃ、無理があるかな。…少し休むか。

「…解った。傷が治るまで安静にしてるよ」

「…ねえ、レオン。あなた、何者なの？」

リフィアもおかしいと思ったか。AMOだって？言えるか。そんなこと。

「言う必要はない。知らないほうが身のためだ」

外はエルナ兵が行き来している。…ここから出ることはなんてできるのか？

下の方から、ドンドンとドアを叩く音が聞こえた。

「政府の人だわ。」

リフィアはそう言って階段をかけ下りる。ドアを開ける音と同時に、大きな声が聞こえた。

「アティ、キヒル、クララ、ネオ、レオン！ここに居るのか、出て来い！」

俺の背中が、一瞬で冷たくなった気がした。やっぱりあの二人、名前を…。

これじゃ、見つかるのも時間の問題だ。

「家にそんな人いません！帰ってください」

「はあ…。そうか。でもお嬢ちゃん、注意してね。アティ、キヒル、クララ、ネオ、レオン、この5人はAMOなんだ。見つけたら政府に連絡してね」

やたら声の大きい男の声は聞こえなくなつて、ドアが閉まる音が大きく聞こえた。

アイツ、2回も名前言いやがった。まだ傷は治ってないけれど出て行くしかないみたいだな。

「…レオン？」

「リフィア。政府に連絡するならしてもいい。俺は出て行くから」
リフィアは、真っ青な顔をしていた。そりゃそうか。好意で助けた男が、AMOだったんだから。

怖いのか？殺し屋だから、俺が怖いのか？そんな目で俺を見ないでくれ。

「本当に、レオンはAMOなんだね…」

そんな悲しそうに、俺を見ないでくれ。俺が惨めに見えるじゃないか。

俺は痛む腕をおさえながら、ゆっくりと立ち上がる。

「レオン、待って！」

なぜだか、リフィアは俺を引き止める。とても、悲しそうな目で。

「けが人、ほうっておけるはずないでしょ？」

「ここにいればあんたの迷惑になる。」

「迷惑なんかじゃない。政府にもレオンのこと言わない。ここにいてほしいの」

…何がしたいんだ、この女。殺し屋引き止めて、ここにいてほしいだつて？

俺じゃなかったら、殺されてるところだぞ？

「…一人に、しないで…」

一人に？ああ、そうか。リフィアも、一人だったか。俺と同じ、一人ぼっちだったのか。

「でも、俺がここにすることが政府に知れたら、リフィアも同罪になる」

そのとき、下からまたドアを叩く音が聞こえた。

「レオン、隠れてて」

リフィアはそう言って下へ下りていく。また政府か。

「失礼する。レオンはここにいるんだ。探せ」

「そんな人いません。出てってください！」

聞き覚えのある声が、下から聞こえてくる。誰だ？

階段を上がる音がする。リフィアは必死で引き止めてる。

「キヒル。」

キヒルの後ろから、クララとネオが顔を出した。…無事、だったのか…。

「レオン、アディアに帰るぞ。ここにいるとエルナ兵に見つかってしまう。」

「…ああ。」

俺はよろけながらキヒルの方へ歩いていく。クララが、俺の体を支えてくれる。

「レオンのこと、ご苦労だったな。感謝する。」

キヒルは、リフィアにそう言うのと、銃をリフィアに向けた。

「キヒル！やめろ！！」

俺はキヒルから銃をとりあげた。キヒルは、冷たい目で俺をにらむ。

「彼女は関係ない。何も知らないんだ。」

キヒルは大きなため息をつく。俺から銃をとって階段を下りていく。

クララは俺を支えながら歩く。俺は足を止めた。

「リフィア。俺たちのことは忘れるんだ。忘れてくれ」

そう言うのと、俺はゆっくりと階段を下りていく。不機嫌なキヒルは黙ったままだった。

家のドアがバタンと閉まる。外は、エルナ兵でいっぱいだった。

「レオン、大丈夫？すごい傷だけど。」

「キヒルがちゃんと安全な場所につれていけないからだよ。」

腕の傷が痛んで、上手く歩けない。道の先に、車の前で待っているアティが見えた。

みんな、無事だったんだな。けがしたのは俺だけだったんだ。…よ

かった。

「レオン、けがしたの？大丈夫？」

アティは俺を見ると心配そうに行った。キヒルは黙って車に乗り込む。

「みんな、乗って。」

アティがみんなに声をかけると、自分も車に乗った。

後ろで、エルナ兵が不思議そうに見ている。口をパクパクさせて、何かに驚いたようだった。

ネオがドアを閉めると、アティは車を出した。今、やっとエルナ兵が気づいて、大騒ぎしてる。

「ふう…。」

クララがため息をつく。

「レオン、これからは、ああゆうの、ないようにしてね」

「…ああゆうの？」

「キヒルを止めたこと。リフィアって人、私たちのこと知ってたんでしょ？」

罪のない人が殺されようとしていたんだ。それを止めるなって言うのか。

「正体が知られたら、AMOは終わりよ。注意してね」

「ああ…。」

…忘れるんだ。リフィアのこと、今日あった出来事…。全部、忘れるんだ。

そうでもしないと、俺がつぶれてしまいそうだ。

…どうすればよかったんだ？あの時、見ない振りをしてでも、キヒルがリフィアを殺すのを、じっと待っていればよかったのか？

おかしい。それは、間違ってる。…絶対、間違ってる。

第二章 選手宣誓：第一話

「大分良くなったね。」

中村先生は俺の腕の包帯をほどくと、嬉しそうにそう言った。

「でも、この切り傷は残っちゃうね…。」

窓に映る、俺の姿。その腕には大きな傷跡が目立つ。

ここに来てから、もう一週間も経つのか。時間が過ぎるのは早いな…。

「レオン、マスターが呼んでるよ。」

ドアの向こうから、ネオの声がする。俺は「解った」とネオに返事をする。

すくつと立ち上がり、そでを直しながらドアを開ける。

あの日以来、俺たちはこのアジトでじっとしている。

下手に動くと、エルナ兵に見つかってしまう。

粘り強いエルナ兵が、エルナに電車を通したのは、昨日のことだ。

もうこれであきらめてくれたのかな…。面倒なことにならなきゃいいが…。

「マスター、レオンです。」

ドアにノックをしよう。中から、マスターの声が聞こえると、俺はドアを開ける。

「傷はもう治ったのか」

大きな椅子をぐるりと回して、マスターは俺の顔を見る。

「はい。もう大丈夫です。」

「そうか。では、アティたちとまたエルナへ向かってくれ。」

「エルナへ、ですか？」

「ああ。アティに仕事内容は話してある。詳しいことはアティに聞いてくれ。」

ふかしていたタバコを灰皿におしつけると、マスターは窓から外を眺めた。

「…レオン、そこにある銃を持って行け。」

テーブルの上に、新品の拳銃が置かれていた。俺は黙ってそれを持ち上げる。

「銃のことはネオに聞くといい。くれぐれも使い方には気をつけなさい。」

「…了解。」

俺は銃を持ったまま部屋を出る。…俺も、人を殺すことになるのか。キヒルがリフィアに銃を向けた時の様に。…出来るのか？俺にそんなことが。

玄関には、アティが椅子に座っていた。俺が来たのに気づくと、すっと立ち上がる。

「レオンもエルナに行くんだね。…銃、もらったの？」

「ああ。マスターが持って行けって。」

「そっか。」

アティはそう言うと、わざとらしくそっぽを向いてしまう。

「レオン、撃つことをためらってはだめよ」

俺の後ろから、キヒルとネオが顔を出した。アティはそれに気づくと先に歩いていってしまった。

「レオン、銃もらったの？いいなあ、新しいじゃん」

ネオが俺の銃を見て言う。キヒルも興味があるみたいだ。

少し遅れて、クララが走って玄関まで来る。アティは少し玄関を出た所で俺たちを待っていた。

「エルナでの仕事内容を話すわね」

みんなが集まったところで、アティは話し始める。

「AMOに依頼をした元エルナ兵のセルフアとファイの二人を暗殺すること。」

あの二人か…。あの二人は俺たちのことを知っているんだ。

…AMOの正体を知られたら、殺すということか…。

「エルナ兵はまだA M Oを探しているわ。そのために二人もエルナ兵に混ざってると考えられる。」

「…大統領官邸の司令室だな。」

「そう。おそらくそこにいるでしょう」

「僕の出番だね。」

「ええ。ネオ、お願いするわ。」

ネオの出番…。遠くから二人を狙って撃つのか。上手くいけばそれだけで済むな…。

「キヒル、クララ、私の3人はエルナ兵全員の暗殺にとりかかるよ。」

エルナ兵全員だって？…どのくらいいるんだ？市街だけでも数百人はいたぞ？

「エルナに着いてから説明するわね。まずはエルナに向かいましよう。」

アティはそう言うつと電車に乗り込んだ。みんなは頷いて次々に乗り込んでいく。

「レオンは僕についててね、ひとりでいると危ないから。」

「ああ…。」

エルナ兵全員を殺すことに意味があるのか？どうしてそこまでしなきゃいけないんだ？

「レオン、A M Oは殺し屋なんだ。」

ネオは俺の思っていることを察したのか、強い視線で言う。

「殺し屋は、人を殺すことをためらってはいけない。」

アティを同じようなことを言う。どうしてそこまで、殺すことになだわるんだ？

「ためらったら最期、逆に殺される。」

殺し屋は常に死と隣り合わせってことか。だからマスターもあんなこと言っただんだ。

死ぬのは怖くない。ただ、人を殺すのが怖いだけだ。…本当か？

父が母を殺したことから逃げてきた臆病者だ。死ぬのが怖くない筈がない。

「…どうして殺さなくちゃいけないんだ？」

俺はネオに訊いた。ネオはそれを聞くと、驚いたような顔をする。

「それが、私たちの生き方だからよ。」

ネオの代わりに、アティが俺の問いに答えた。ネオは何か言いたそうだったが、アティが首を横に振るのを見ると、ため息をついてそっぽを向いてしまった。

殺さないと生きてゆけないほど、人間は弱いのか。

人を殺すことが俺たちの生き方だって？そんなのおかしくないのか？

なあ、俺はこんなことをするために、人を殺すために生まれてきたのか…？

第二章 選手宣誓：第二話

「降りるわよ、レオン」

クララに声をかけられて、エルナに着いたことにやっと気づいた。重い足を引きずりながら、俺は電車から降りる。駅のホームにも、エルナ兵が溢れるほどいた。

「ここから二手に分かれて行動するわよ。ネオとレオンは大統領官邸へ。キヒル、クララと私の3人は市街へ向かう。」

「了解。こつちが終了したら合図を送るよ。」

「ええ。お願いね。」

アティがそう言うのを確認すると、ネオは駅を出て行く。アティに言われて、俺はネオについていく。

ネオの顔は、何かに脅えているように見えた。

「レオン、大統領官邸の司令室はあそこだよ」

ネオはすつと指をさす。大きな建物が一番上。ガラス越しに、人の姿が見える。

キヒルの言った通り、あの二人がそこにいることが見て取れた。

「ネオ、どこに行くんだ？」

ネオは官邸への道と違う道を選んで歩いていく。

「僕の仕事はあの二人を暗殺することだ。官邸のエルナ兵を相手にしている暇はない。」

ネオの選んだ道の先に、大きなビルが見えた。官邸と同じくらいの高さだ。

あのビルから、撃つのか。距離は結構あるが…。

「レオンはビルから来るエルナ兵を倒してくれるだけでいい。」

そう言つて、ネオは銃の撃ち方を丁寧に教えてくれた。

ビルに上がって、ネオは銃の準備にとりかかる。

その時、一人のエルナ兵が屋上に上がってきた。俺はとっさに引き

金を引いていた。

乾いた爆発音が、その場に響いた。同時に、入ってきたエルナ兵はその場に倒れる。

「やるじゃん、レオン。」

少し驚いた様に、ネオは微笑む。俺の手は震えていた。

「初めてで、そこまでできれば上出来だよ。」

「殺したのか？俺は、罪のない人を、とつさに殺したのか？」

ネオは倒れたエルナ兵を仰向けにした。右の肩から、大量の血が流れている。

ネオは立ったまま、持っていた銃で引き金を引いた。銃弾は、左胸に直撃した。

「左胸か首を狙うといいよ。一発は難しいかもしれないけど。」
人を殺すって、こんなにあつけないものなのか。俺は持っていた銃を落としてしまった。

血が、絶えず流れてゆく。俺は人間のこんな姿を見たくなかった。

「レオン、大丈夫？」

ネオが心配して、俺が落とした銃を拾ってくれたけど、俺は受け取れなかった。

手が、ガタガタ震えて、恐い。俺は、今殺した人の名前も知らなければ、声も知らない。

ただこの屋上に上がってきただけなのに、俺が撃ち殺してしまった。俺は、何てことをしてしまったんだ……。

「レオン、恐がってる暇なんかないんだよ。」

ネオは震える俺の手に銃をしっかりと持たせる。

すると、市街の方から、連続した銃声が聞こえてきた。

「アティたちだ。……僕たちも、始めるよ。」

そう言つて、ネオは準備していた銃をかまえる。

大きな爆発音と同時に、官邸の司令室から、白い煙がもくもくと舞い上がる。

風が吹いて、官邸の司令室がむき出しになる。そこにいるのは、元

エルナ兵のセルフアとファイ、司令室のエルナ兵、それから司令室の出入り口の前に、エルナ兵に捕らえられたリフィアがいた。

「…リフィア?!」

不機嫌そうなエルナ兵二人に挟まれて、不安げにあたりを見回しているリフィア。

目を疑ったが、それは間違いなくリフィアだった。

「レオン?!」

ネオが俺の名前を呼ぶ。俺はそれでも走ることをやめなかった。

無我夢中で、俺は走っていた。騒いでいるエルナ兵に目もくれず、俺は走った。

どうしてなんだ? どうしてリフィアがそこに…?俺がいたことが知れたのか?

何のためにリフィアを?リフィアをどうするつもりなんだ?

「レオン!行っちゃだめだ!!戻れ!」

ネオが必死で俺に声をかける。俺は止まらない。止まることなんか、できない。

官邸のエルナ兵は走ってくる俺を見て呆然としていた。

まさか、俺がAMOだとは思わなかったんだろ。エレベーターを使って最上階まで行く。

司令室に着いたところには、息が切れていた。

「レオン!」

リフィアは俺を見ると驚いて声を上げる。ファイは俺を鼻で笑った。

「ふっ…。自分から出向いて来るとは、正直な奴だな。」

「レオン!罠だ!そこから逃げろ!」

ネオは必死の大きな声で俺に呼びかける。罠だつて?

だけど、リフィアをこのまま残して逃げるわけにはいかないんだ。

「もう一匹、素直になれない奴がいたか」

司令室にいた二人のエルナ兵が俺に近づいてくる。

俺は連続で引き金を引いた。ふたりのエルナ兵がその場に倒れる。

「抵抗する気か。まだお子様だな……。」

長い爆発音が、司令室に響いた。ファイ、セルフアが倒れると、リファイを捕らえていた二人のエルナ兵も同時に倒れこむ。

一瞬にして、司令室にいたエルナ兵を殺してしまった。

「リファイ、大丈夫か？」

力無く、リファイはひざまづく。手が震えていた。

「こわ、かった……。」

震えた声で、リファイは言う。涙が落ちたのを、俺は見逃さなかった。

「リファイ、走れるか？ここから逃げるんだ。」

リファイは黙って頷くと、目を腕で力いっぱいにふいた。

司令室の奥に非常階段を見つけると、迷いもせずその階段をかけ下りた。

第二章 選手宣誓：第三話

市街には、一人もエルナ兵が残されていなかった。

ネオがいたビルの屋上に、ネオの姿は見当たらなかった。

先に逃げたのか？セルフアとファイを殺したのは、間違いなくネオだ。

だけど、気がついたときには、そこにネオはいなかった。…どこにいったんだ？

「レオン、待つてたぞ」

駅のホームには、キヒルが腕組みをして待つていた。

「そいつは？ああ、リフィアか。」

キヒルはそう確認すると、電車に乗り込んだ。リフィアが乗るとすぐに走り出す。

「キヒル、みんなは？」

電車の中に、みんなの姿は見当たらなかった。まるつきりからっばだ。

「アティたちは先にアディアに戻ったよ。」

「そうか。ネオも、一緒なのか？」

「…ああ。ネオも一緒に戻った。」

キヒルはそう言う座席に座って、動く風景を眺めた。

俺はキヒルの言葉を聞いてホッとした。そうか、先に戻ったのか…。俺はふうとため息をつく座席に座った。リフィアはその隣に座る。

「レオン、これからどこに行くの？」

「アディアだ。AMOのアジトに戻るんだ。」

「…そっか、アディアに…。」

リフィアはホッとした様に俺の胸に倒れ掛かる。俺の膝に頭を乗せると、リフィアは眠ってしまった。…疲れたんだろう。

俺も、今日は疲れた。走って、リフィアを助けて…なんとか逃れられた。

「エルナ兵は、全員殺したのか」

「ああ。もれがあつたのか？」

「いや……。俺の見たところではなかった。」

「そうか」

これから、エルナはどうなるんだろう。今、エルナにいるのは市民だけだ。

近くの大国に乗っ取られてしまいかもしれないな。そうになったら、仕方ない。

「アジトに戻ったら、リフィアをマスターに紹介するんだ。」

「ああ。解つた。……リフィアもA M Oに入るのか？」

「マスターが了承すればな。そうしないとリフィアが殺されるだろう」

リフィアが殺される？そうか、俺たちを知ってしまったから。

……それなら、俺がA M Oに来たときも、A M Oに入ることを拒んでいたら殺されていたのか？

考えられなくは無い。俺はA M Oのアジトの場所も、アティという名前も知っていたんだ。

ただで帰してくれるほど、A M Oは甘くない筈だ。

俺の背中に、寒気が走った気がした。　恐ろしい　なんて、あのと
きは思わなかった。

むしろ、マスターが俺を救ってくれたと感謝した。　優しい　マ
スターの笑顔を、俺は思い返していた。

……殺されるなんて感覚は無かったんだ。そこが、A M Oという殺し
屋のアジトだと解つていても。

怖いなんて欠片も思わなかったんだ。

「リフィアか……」

マスターは俺の座っているソファの向かいに座るとつぶやいた。

「解つた。リフィアをA M Oに入れよう」

少し間があつたが、マスターはそう言った。アティが「ありがとう

「ございます」と言っただので俺もそれに合わせて言った。

マスターはふうとため息をつく、まだ新しいタバコを灰皿につぶしてしまった。

「レオン、保健室に行つて。ネオが待つてゐるわ。」

アティはそう俺に言う。ネオが保健室に？ けがでもしたのか、あのネオが…？

「…解つた。」

俺はそう言つと、部屋を静かに出た。そこに、キヒルとクララが立っていた。

「リフィアのこと、了承してくれたか？」

「ああ。」

俺が返事をする、ホツとした様に二人は微笑む。二人を後にすると、俺は保健室に向かった。

窓から見える外は、うす暗くてよく見えない。俺が保健室のドアを開けようとする、中から中村先生がドアを開けた。

中村先生は少し驚いた顔を見ると、すぐにネオの場所を教えてください。

「レオン、無事だったんだね。よかった。」

「ネオ？！ どうしたんだ、そのけが？！」

白いカーテンを開けると、体の所々に包帯をしたネオがベットに横になっていた。

「油断したよ。いつの間にかエルナ兵に囲まれていたから…。アティたちが助けに来てくれてなかったら、これだけでは済まなかったよ。」

頭にも、胸にも…包帯がされてあった。これだけつて、これ以上つて有り得るのか？

「エルナ兵に、やられたのか…？」

「うん。情けないね。気づかなかつたなんてさ。」

可笑しそうに、顔は笑う。何が、そんなに可らしいんだ？…どうし

て…。

「俺がネオの言うこと聞かなかったから…。ネオ、ごめん。俺…。」

「レオンのせいじゃないよ。…むしろ、レオンには感謝してる。ありがとう。」

…ありがとう、だって？俺はお礼を言われることはしてない。

俺は必死で逃げると言っているネオを無視して、リフィアを助けにいったんだ。

罨だった。AMOをおびきよせるための罨だった。なのに、俺は見事に罨にはまった。

「…思い出したんだ。大切なこと。レオンはそれを思い出させてくれた。」

嬉しそうにネオは、微笑んだ。

「僕にはね、兄がいたんだ。」

「…お兄さん？」

「うん。僕の実の兄。彼と一緒にAMOに入ったんだ。ちょうど5年前かな。AMOには、アティと兄さん、僕の3人がいたんだ。

南の大国バセタの大統領を暗殺することが、僕たち3人の初仕事だった。」

さつき、ネオ、『いた』って言った？今はもういないってことか？

「遠くから射撃する…簡単な仕事のはずだったんだ。だけど、何かの拍子で僕たちが大統領を狙っていると知られてしまった。

バセタ兵は僕たちをおびきよせるために市民を人質にとった。」

「どうする？アティ。」

「そうね…。ここで様子を見ましよう」

アティも初仕事だったから、どうしていいのかわからなかったんだと思う。

僕たちはしばらく兵側の様子を見ることにしたんだ。

「…ネオ、あれ…デイルじゃないか？」

市民の人質の中に、僕と兄が知っている仔を見つけたんだ。

彼女はデイルと言って、昔僕と兄さんがバセタに住んでいたときによく遊んだ友達だった。

「ルオーネ、どこに行くつもり？」

「決まってるだろ。…助けに行くんだよ。」

アティは兄さんを引き止めたけど、兄さんは聞かなかった。

僕も何度も呼びかけたけど、兄さんが止まることはなかった。

「アティ…どうしよう…」

案の定、兄さんはバセタ兵に捕らえられてしまいそうだった。

「構わないわ。大統領を撃ちなさい」

まだ射撃練習しかしたことがない僕にできるのかって、不安になったよ。

だけど、大統領を殺さないと、兄さんが殺されるって解ってたんだ。…。」

僕は銃を持ってかまえた。手が、震えていた。そのとき、短い爆発音がしたんだ。

僕は、引き金を引くことができなかった。兄さんの撃った銃弾は、大統領の左胸に直撃した。

大統領が倒れたと同時に、近くにいたバセタ兵が兄さんを撃つたんだ。

「兄さんが生きていたら、レオンと同じ年だった。僕は兄さんを中心としてしまった…」

ネオは悲しそうに、天井を見上げていた。ネオの目に、涙が光った。「今日、レオンが官邸に走っていったとき、僕は悪夢を見たと思っただよ。だけど、撃たなきゃ兄さんの二の舞になるって解ってたから…もう、仲間を失いたくなかった。間違ってレオンを撃ってしまうんじゃないかって不安もあつたけど、

そのときは兄さんのコトが頭から離れなかったんだ。…レオンが無事で、本当によかった…」

ネオは俺の情けない顔を見て、嬉しそうに笑う。ネオの手を、俺は

震える手で握った。

「兄さんは、僕たちのことを信じていたから安心して人質の助けに行ったんじゃないか、って思うんだ。」

兄さんは僕たちが助けしてくれるってどこかで信じていたんだ。けど僕は、兄さんを裏切ってしまった…。」

「裏切られたなんて思っただけだよ。ネオはお兄さんを助けようとしたじゃないか。」

俺は、ママがパパに殺されるのを、黙って見ていたんだ。

俺をかばって、ママは殺された。俺なんかいなければ、ママは死なずに済んだんだ。

「ネオは…俺を助けてくれたじゃないか…。それだけで十分だよ…。」

「俺がいなければ、パパもあんな風にならなかった。俺が、俺なんかいなければよかったんだ。」

俺はずっと愛されると思ってた…。ずっと愛されるなんて自惚れていたんだ。

「レオンは、兄さんによく似てる…。アティも、最初驚いたって言うていたよ。」

ねえレオン。僕はね、兄さんは幸せだったんじゃないかって思うんだ。僕も、兄さんも両親に捨てられた身だったから、

優しくしてくれるマスターや中村先生に、すごく感謝した。僕は、

あの頃が一番幸せだった。…だから、兄さんもそうだったと思うんだ。」

俺はずっと愛されていたかった。だから、愛してくれる二人を失ったとき、もう生きてる意味なんて無いって思ったんだ。

「なあネオ、ネオは今幸せか？」

「うん。幸せだよ。みんながいるからね。」

みんな、か。それだけで幸せだっていえるんだな。俺はあの頃、気がつかなかった。

気づいていれば、何かが変わっていたのかもしれない。

ママを、助けられたかもしれない。パパを、助けられたかもしれない。

「レオンは？」

「…え？」

突然、ネオにそう聞かれて、俺は戸惑う。

「レオンは、今、幸せ？」

今、俺のいる場所を考えてみる。ここは殺し屋のアジト。いつ殺されたっておかしくない。

だけど、俺は今までにいなかった仲間がいる。学校で会う薄っぺらい友情の仲間なんかじゃなくて、俺には信頼する仲間がいる。

支えてくれる人たちがいる。優しくしてくれる人たちがいる。それを、俺は幸せって呼んじゃいけないのか？

「…ああ。幸せだ。」

それを聞いたネオは、嬉しそうに、本当に嬉しそうに笑ったんだ。

「そつか…。よかった…。」

俺は心が痛んだけれど、その後は何も言わなかった。ネオは目を閉じると、すぐに眠ってしまった。

ねえママ。俺を幸せにしてくれたのはママなのか？もう、十分だよ。なあ、神様がいるなら、俺の願いを聞いてくれ。

もう二度と、俺の前から俺の大切な人を失くさないでくれ。もう、あんな思いは二度としない。俺が、助けるから。

俺は死んだって構わない。俺の目の前で、大切な人が死ぬのはもう嫌なんだ。

俺は幸せにならなくなったっていいから。もう、十分幸せだったから。

俺には、こんな幸せが、恐くてたまらないんだ…。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4864a/>

A black waltz

2010年12月31日05時18分発行